

第13回県民公開講座 平成29年度感染症予防衛生講習会開催報告

平成29年度感染症予防衛生講習会が6月22日（木）午後1時30分から、新潟市民プラザ（NEXT21）で開催されました。この講習会は平成17年から開催しており、今年で13回目となります。（一社）新潟県ペストコントロール協会が主催、新潟県、新潟市、（公社）新潟県獣医師会の共催で、県、市町村、教育関係、福祉施設、食品事業者のほか、一般県民に広く受講していただくため、県民公開講座としています。

今年の講習会は、講演Ⅰ・講演Ⅱの二部構成で実施いたしました。

講演Ⅰでは、（公社）日本ペストコントロール協会技術顧問、医学博士の田原雄一郎先生から、「昆虫は面白い」と題して御講演をいただきました。

昆虫は10億年前に誕生し、現在まで様々な環境変化に適応しており、地球上の動物のうち、8割を昆虫が占めるとのことでした。昆虫は様々な場面で人の役に立っており、古くは農作物の受粉、絹糸の生産、蜂蜜があり、近年では色素の原料だけでなく、化粧品や工業・医療分野などへの活用に向けた研究が盛んに行われているそうです。反対に害となる点は、農作物を食い荒らす農業害虫や貯穀害虫、先日国内で初めて確認されたヒアリやハチによるアナフィラキシーショック、そして古来から恐れられてきた、ノミや蚊による感染症です。

特に蚊は、ほんのわずかな水でも繁殖・成長でき、極めて個体数が多く、マラリアやデング熱など毎年数百万人の死者を出す感染症を媒介します。蚊は、人類にとって地上最大の脅威であるとの御意見でした。

近年、デング熱やジカ熱の感染が報道され、日本でもその脅威を身近な事として取り上げられるようになってきましたが、海外に比べるとその認知度はまだまだ低く、「島国である安心感」から抜け出せていないように感じます。ヒトスジシマカが広く生息する日本においては、ウイルスを持った人が入り込むことで一斉に感染が拡大するリスクをはらんでいるということを認識し、広く啓発活動をしていく必要があると感じました。

講演Ⅱでは、国内のノロウイルス研究の第一人者で、（一社）新潟県環境衛生中央研究所理事、医学博士の西川眞先生から、「感染症予防～日常対策を実績で実証する～」と題して御講演をいただきました。小中学校の給食で起こった刻みのりやパンを原因とした食中毒の事例を挙げて、感染源は「製造」だけでなく「加工」や「提供」の場面にも潜んでいるという御指摘がありました。きちんと加熱処理を行った食品でも、その後の加工の際に素手で触れ、汚れを付着させてしまうことが珍しくないとのことでした。食中毒や感染症対策のため、事業所では数多くのマニュアルやチェック表などが活用されていますが、あまりに複雑になりすぎ、マニュアルどおり行動することが負担となり、その結果形骸化しているケースがあるそうです。意味のある、機能する予防策を行うためには、やみくもにマニュアルを作って複雑にするのではなく、実際に作業できるのか確認し、重要なポイントに絞って、それを確実に実施させることが重要とのご意見でした。

講習会終了後のアンケートにおいても、「蚊の危険性がよくわかった」「蚊以外の衛生害虫や感染症についても聞きたい」「ノロウイルスについてももっと聞きたい」などの感想をいただき、身近な問題である今回のテーマへの関心の高さが伺えました。

来年度も、より拡充した内容での開催が期待されるところです。



田原雄一郎先生と講演の様子